

鉄剣の副葬 鉄剣と鉄刀の共伴関係から

入江 剛弘

日本の近接戦用の武器と言えば、「日本刀」と呼ばれるように、刀が主流だった。しかし、古代に目を向けると刀よりも剣のほうが主流の武器であった。剣と刀の交代時期は、古墳時代であり、古墳時代初めには、新たな鉄供給ルートを掌握した首長が所持した武器が鉄刀であり、とりわけ、素環頭鉄刀であったという見解がある。鉄刀を副葬する古墳がある一方、鉄剣を副葬しつつける古墳もある。そこで、鉄剣を副葬することと鉄刀を副葬することの違いを考察する。

まず、時期を 弥生時代中期～弥生時代後期、 弥生時代終末～古墳時代初頭、 古墳時代前期前半、 古墳時代前期後半の4期に分けて検討していく。

鉄剣の副葬本数を検討すると、全時期を通じて、大半の遺構では、1本または少数本副葬されるが、古墳時代になると多数本副葬する遺構が増える。

鉄剣を副葬する遺構の分布を見てみると、期では、広形銅矛・銅戈の分布圏と銅鐸分布圏の地域と重なって分布している。～期では、瀬戸内海周辺に、鉄刀を共伴する遺構の集中がみられる。

鉄剣の副葬本数と、鉄刀の共伴本数を検討すると、少数本鉄剣を副葬する遺構は、少数本共伴し、多数本副葬すると多数本共伴する傾向がみられる。

期と期の古墳の構成や、規模を比べると、期には、鉄刀を共伴する古墳が、前方後円墳に集中する他は、構成に特徴は見られないが、古墳の規模は、鉄刀を共伴する古墳のほうが、規模が大きいという傾向がみられ

る。

鉄剣のみを副葬する古墳は、鉄刀を共伴する古墳よりも規模が小さい。墳墓の造成を考えると、墳墓の大きさと権力の強さには、比例関係があると思われるので、鉄刀を副葬する、鉄供給ルートを掌握した首長よりも、権力のレベルが低い首長に、副葬された武器が、鉄剣であったと考えられる。